

## 徒然(つれづれ)の記 その二

### 人類と火

火を使う動物は人間だけです。ものの本には、人類は新石器時代から火を使っていたと書かれています。

ホモ・エレクトスと言われた原始人類が火を使っていた証拠が、世界のあちこちで見つかります。

ペキン原人の頭骨が発見された洞窟には、炉の跡のような厚い灰の層があったそうで、そこで火を燃やし続けて火種を切らさないようにしていたのではないかと説く人もいます。

人類の祖先は、山火事のあった後、残り火のそばに近づくと、そこが暖かくて明るいことに気づいたのでしょう。

たまたま、逃げ遅れて焼け死んだ動物を見つけ、その肉を食べてみると柔らかくて生の肉よりずっと美味しかった。

…そうしたいいくつかの出来事に出会い、原始人類は、火で暖をとったり、火を明かりとして使うことを覚え、獣の肉や魚を火に焙って食べる習慣を身につけていったのでしょう。

彼等は、はじめは火を起こす術を持ち合わせていませんでした。

火の元になる「種火」は、たぶん、落雷や枯れ木の枝がこすれ合って起きた山火事の跡から拾って来たのでしょう。

やがて人類は自由に火を起こせるようになりました。

どのようにしてその技術を習得したのかわかりませんが、木に穿ったホゾ穴の中で、先の尖った木の棒を回転させるとか、溝の中で往復運動をさせ、こすれ合う木の摩擦熱を利用して発火させるようになったのです。

南米のジャングルには、今でもこの方法で火を起こしている未開の種族が住んでいるそうです。

このほか、人類の祖先たちは、鉄分を含む石を相互に打ちつけて燃えやすい物(火口=ほくち)の上に火花を飛ばせて火を起こす方法も知っていたようです。